

1988年日本天文学会春季年会大阪開催特別企画： 展示と講演会

『近代天文学の始まりと大阪』

日本天文学会大阪開催特別企画実行委員会

1988年5月、日本天文学会春季年会在近畿大学で開催されます。天文学会は80年の歴史がありますが、大阪の地で年会在開催されるのは今回がはじめてのことです。折しも、東京天文台が東京大学付置研から国立研究所に改組される時期に当たり、日本の天文学の歴史の一つのエポックとなるでしょう。

東京天文台、ひいては現代日本天文学のルーツが、江戸時代の大阪にあることは、必ずしも多くの人々に知られているわけではありません。18世紀末、浪華に「先事館」という天文暦学の塾が麻田剛立により開かれ、その研究グループは西欧の天文学を導入して、天文学の近代化を進めていました。その中から、高橋至時、間重富等が幕府天文方に出向き、寛政の改暦や、伊能忠敬の国土測量事業の推進、などを遂行し、当時のわが国の学術研究のあり方を根底的に改編する大きな役割を果たしました。その後、幕府天文方は、天文暦学に限らず、西欧の学術全般に亘る研究のセンターに発展して、それが明治期に現在の東京大学となりました。今日、日本の近代化の問題が注目されていますが、これは、江戸期の浪華における天文学研究の歴史を抜きにしては考えることが出来ません。

幸い、大阪には、今も、当時の資料が多く残されており、それについての科学史上の研究が積み重ねられています。今回の天文学会の折りに、関係者の皆様の御協力により、これらの歴史資料の一部を展覧するとともに、科学史天文学史の碩学による講演会を企画しました。

天文学会員諸氏の多数の御参加を期待いたします。

1) 歴史資料の展示

5月17日(火)～19日(木)

近畿大学11月ホール

●「先事館」に関わる歴史資料の展示

先事館の人々が残した当時の天体観測記録、研究書などを公開すると共に、江戸期から今日にいたるわが国の天文学史の流れを、年表、人物、当時の研究法、観測の解説を通じて、パネルにより紹介する。

●近畿大学図書館所蔵希こう本の公開

近畿大学図書館には、コペルニクス、ガリレイ、ケプラー、ニュートン等の著書の初版本など天文学史上重要な資料が所蔵されている。その一部を近畿大図書館の御協力をえて展示する。これらの資料は、まさに先事館グループの研究テーマそのものであった。先事館の遺品と西欧の原典との出会いは、今回が初めての企画となるだろう。

2) 講演会

日本の近世天文学の歴史を主題として、浪華の先事館を中心に論じる。わが国の近代科学と浪速に代表される町民文化との関わりについても考察したい。

5月17日 午後5時30分～8時

近畿大11月ホール 大ホール

講演者 藪内 清(京大名誉教授)

有坂 隆道(関西大学教授)

特別企画資料

近代天文学と近世大阪の天文学者たち

橋 本 敬 造*

日本における天文暦学は、553年に中国の暦法が導入されて以来、中国天文学の知識にのっとって行われ、1685年、保井(後に渋川姓を名のる)春海が作成した貞享暦が施行されるまで、823年もの長きにわたって、中国の唐代に作られ、日本では平安期に採用された宣明暦が踏襲されていた。その間、陰陽寮の暦職家のほうも

安部氏、または賀茂氏によって完全に世襲化されるという状態が続いていた。

保井春海(1639-1715)は、中国の元代の1281年に施行された郭守敬らの授時暦法を研究するとともに、陰陽頭の土御門(安倍)泰福(やすとみ)に天文暦学を学んだ。1684年末に幕府初代の天文方になった春海の貞享新暦(国暦と呼ばれた)は、その後、70年間にわたって用いられたが、8代将軍・吉宗のときになって、西洋

* 関西大学 Keizo Hashimoto: Astronomy and Astronomers of Osaka in Edo Period